

今回の MSC5 では、2 年前の MSC4 に比べると、JAMS 会員による報告の数はやや減少したようである。そのような中で、今回の会議で報告された会員は、いわば MSC の常連として度々報告をなさってきた方々ばかりである。たゆみなく研究成果を披露し続ける、その真摯な姿勢には頭が下がる。他方、前回の会議で目立っていた大学院生の会員による報告は、今回はなかった。博士論文の執筆中であつたり、現地調査の最中であつたり、諸々の理由でタイミングがあわなかったのだろう。他方、現地調査中の大学院生を中心に、相当数の若手会員が報告と討論を聴講されていた。これらの方々が、次回以降の MSC で最新の研究成果を発表して下さることを期待したい。それと同時に、JAMS の創設期を担われてきた世代の会員の方々にもぜひご報告いただき、日本におけるマレーシア研究の水準を示していただければ、と思う。今回は報告をサボった筆者が、このようなことを申し上げる資格はないのだが。

ジャウイ文書研究会国際ワークショップ報告

—International Workshop "Re-examining the Jawi Tradition in Southeast Asia"—

菅原由美（天理大学）

2006 年 9 月 23 日、京都大学地域研究統合情報センター 3 階会議室において、同センター共同研究会「イスラム教圏東南アジアにおける社会秩序の構築と変容」及び科研費プロジェクト「イスラム教圏東南アジアにおける学知の制度化と実践」及びジャウイ文書研究会の共催で、ジャウイ研究国際ワークショップが開催された（ジャウイ文書研究会としては第 29 回研究会にあたる）。内容は以下の通りである。

Omar Farouk 氏（広島市立大学）が司会となり、まず日本のジャウイ文書研究会によってこの間行われてきた研究活動概要が紹介され、これまで世界でもあまり顧みられてこなかったジャウイ研究の必要性を主張し、ジャウイ関連研究史の再検討とその残された課題について考えるために、このワークショップを開催したことが説明された。

まず Adnan Nawang 氏（Universiti Pendidikan Sultan Idris）が、「*Jawi and the Malays*」というタイトルで、「ジャウイ」とイスラムとマレー人の関係について、マレー世界の歴史に沿った概説をおこなった。同世界のイスラム化の歴史から始まり、英領マレーにおける教育とジャウイの使用の歴史まで概観し、現在のマレーシアにおけるジャウイの意味についても説明した。彼はマレーシア以外の東南アジア島嶼部諸国（インドネシア、ブルネイ、シンガポール）におけるジャウイの位置については研究が不足していると述べた。次に、西尾寛治氏（東洋文庫）は、「*The Development of Jawi Concept: Jawi as Categories of People*」というタイトルで、「ジャウイ」という概念の歴史的变化を、辞書、旅行記など様々な史料を

もとに説明した。Jawi pekan や Jawi peranakan という呼称の持つ意味についても考察が加えられた。西尾氏の発表に対して、海外からの参加者から質問が相次ぎ、議論がつきなかつた。今でも島嶼部東南アジアにおいて、「ジャウィ」またはそれに近い言葉が地域によって様々な意味で用いられていることを考えると、現在の地域間の比較も取り入れてみるとどのような図を描くことができるのか興味深く感じた。Syed Muhammad Dawilah 氏 (Universiti Sains Malaysia) は、“The Role of the *Kitab Jawi* in the Islamization Process in the Malay Archipelago”というタイトルで、マレー世界のイスラム化の歴史と、その過程で執筆された様々なジャンルの *kitab Jawi* の内容とそのマレー世界への影響力について分析をおこなった。そして、それら *kitab jawi* の存在が、西洋化以前のマレー世界におけるイスラム教の知識の深さの証明になることを主張した。菅原由美 (天理大学) は、“Publishing *Kitabs* in Late Colonial Java and Local Islamization”で、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ジャワ社会に向けて、*pegon* (ペゴン: アラビア文字ジャワ語) で執筆され、出版された宗教本のテーマと内容について分析をおこない、ジャウィにより執筆された出版物との比較をおこなった。Dick van der Meij 氏 (Universitas Islam Negeri Syarif Hidayatullah) は、“Islamic Manuscripts and *Kitab Kuning* in the *Pesantren*”というタイトルで、インドネシア各地に存在するプサントレンとそこで用いられてきたイスラム学教科書、いわゆる“*kitab kuning*”に関する、研究史を含めた概説とその2つの最近の傾向について説明をおこなった。また、彼はそうした教科書だけでなく、*Nabi Bercukur* や *Kitab Ambiya* のような、主に儀礼で用いられるイスラムの物語を、もう一つ別のイスラム・テキストとして挙げ、それらが書き残されている写本の種類が非羽状に豊富であることとそれにも関わらず研究が十分に進んでいないことを指摘した。彼は、インドネシア人自身がそれらの写本を読めなくなっていることを危惧していた。

そして、最後に青山亨氏 (東京外国語大学) が、“Looking Back on Five Years of *Jawi Documents Studies* in Japan”と題して、ジャウィ研究会のこれまでの歴史の総括をおこなった。海外からの発表者からは、日本でこのような研究会がおこなわれてきたことを興味深く受け止められ、今後は情報の交換を含め、さらに海外への成果発信が求められた。ワークショップ全体として、これまで研究されてきたことの総括が多く、マレー世界を研究する上で、ジャウィが重要なテーマになることが確認された一方で、今後の研究に期待されること、今後の課題等については鮮明になってきたようには見えなかった。また、ジャウィを研究する目的や意味合いが、マレーシアとインドネシアでは異なっているような印象を受けた。この点についても、検討する余地があるだろう。

次回第30回ジャウィ文書研究会は、10月21日(土)に東京外国語大学AA研にて開催される予定である。